Action for Butterflies

チョウの舞う豊かな自然を将来へ

多くのチョウが減少する中で、減少した年代や度合は種によって異なります。当協会では、チョウの絶滅を種の単位で防ぐとともに、地域個体群もできるだけ守ってゆけるよう、「都道府県単位での絶滅をこれ以上防ぐ」という目標も掲げています。しかし残念ながら、1990年代から2000年代にかけてという比較的最近になって、地域的な絶滅が相次いだチョウがいます。その代表がチャマダラセセリです。近縁のヒメチャマダラセセリも減少傾向にあり、今回は、これら２種の現状と保全への取り組みについてご紹介します。

地面で吸水するメス。
暑い日はメスも盛んに吸水する。

キンロバイの葉裏に産卵された卵

幼虫。通常は巣の中にいる。

気候変動の影響を受け、生息環境が急激に悪化しているヒメチャマダラセセリ

ヒメチャマダラセセリは、日本では北海道のアポイ岳周辺にのみ生息する、国内での生息地が非常に限られるチョウのひとつです。海外では、韓国からアジア北部を経てヨーロッパ全域まで広く生息しています。日本では比較的最近の1973年に発見され、生息地が限られることから1975年に天然記念物に指定されました。アポイ岳は地質が特異な地域で、ヒメチャマダラセセリのみならず、多くの固有植物も見られ、生物多様性の保全上、重要な地域となっています。ヒメチャマダラセセリの生息地は高山植物が生えるお花畑であることから、個体数や生息環境は安定していると思われていました。しかし、1990年代になって、生息地の植生が変化していることが明らかにされ（渡邊，2005）、本種も危機的な状況になっているとの報告がなされました（渡辺，2011）。

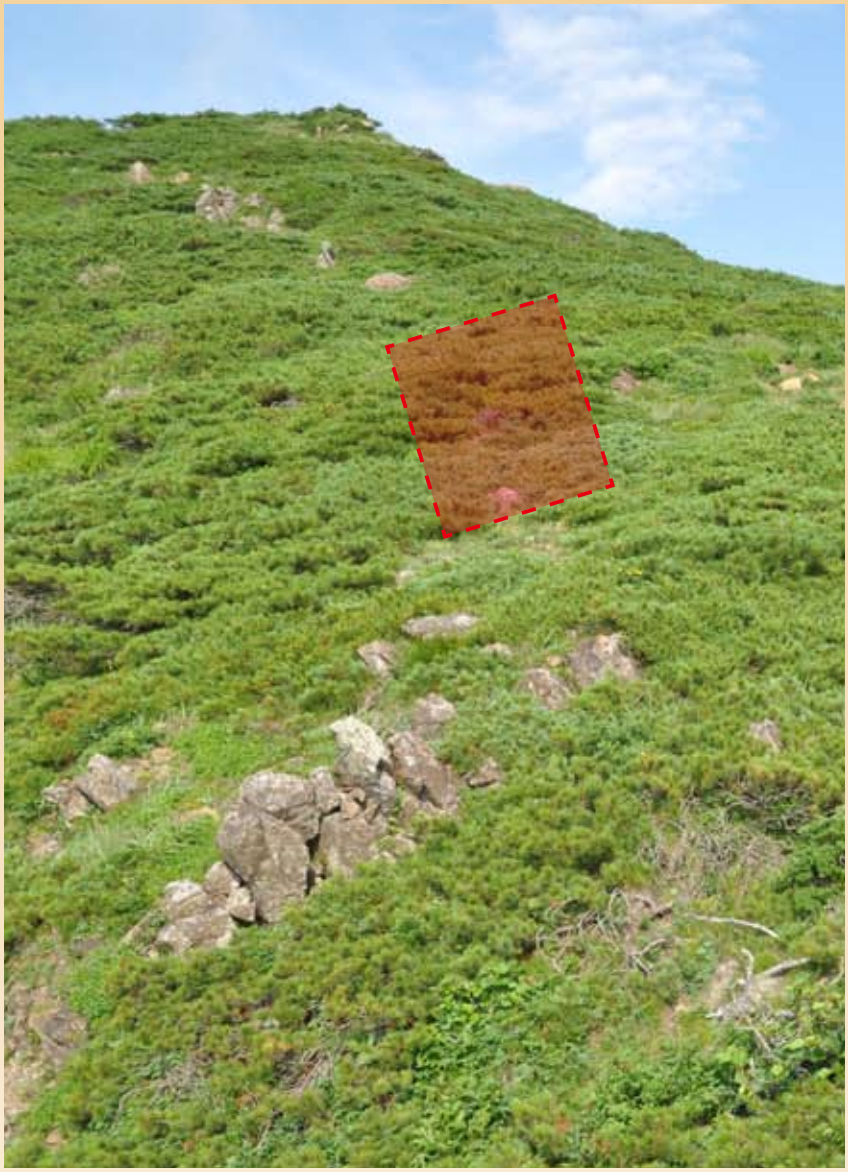
こうした状況から、本種の保全のためには早急な生息状況の把握が必要と判断しました。生息状況の調査を実施するとともに、保全の方向を検討しています。

■現在の生息状況

かつては、アポイ岳周辺のいくつかの稜線部に生息していたのですが、現在でも個体数が多いのは「馬の背」と呼ばれる高山植物の多い地域のみで、その他では散発的に確

馬の背周辺の景観（1987年6月）
濃い緑がハイマツでその他の部分は高山植物のお花畑でヒメチャマダラセセリの生息地（夏秋優撮影）

同（2011年6月）
ハイマツのエリアが拡大し、年々産卵できる場所が減少している。



遷移が進行し、ハイマツにほとんどが覆われた場所。赤点線の区域のハイマツを除去するなどの、試験的な保全対策の実施を検討している。

認されるのみです。写真に示したように、本種の生息地では、ハイマツ林への遷移が著しく進行しており、年々、お花畑が減少しています。50年前との比較では、お花畑は半減しているとも報告されています。本種の食草であるキンロバイ自体はそれほど減少しておらず、ハイマツが繁茂している場所でも、空いた空間にキンロバイの大株が繁茂しているのですが、ヒメチャマダラセセリもチャマダラセセリ同様、地面の露出した場所にあるごく小さな株にのみ産卵することから、生息できる場所が激減しています。また、幼虫の調査結果から、成虫の個体数は全体でも数百個体以下と思われます。個体数が少ない状況に加えて、今後さらに環境悪化の継続が予想されることから、早急な保全対策が必要となっています。

■保全に向けて

研究の結果、こうした植生の変化は、気温の上昇およびそれに伴う気象の変化が主要因であると考えられています。そうした要因は、短期的にはどうすることもできない問題であるため、ヒメチャマダラセセリおよび貴重な高山植物を保全するためには、ハイマツやゴヨウマツへの遷移の進行を人為的に抑えることが必要となっています。また、近年ではエゾシカも侵入して高山植物に悪影響を与えており、問題解決がさらに複雑になってきています。

当協会では、ヒメチャマダラセセリの保全のために、地元の団体と連携して、生息できる環境の拡大を図ることを考えています。まずは試験的にハイマツの人為的な駆除を行い、その結果を踏まえて、さらなる対策を進める予定です。

渡邊定元（2005）アポイ岳における高山植物群落の50年間の変遷．日本生態学会誌 55:105-110.
渡辺康之（2011）ヒメチャマダラセセリの生態と保護の現状．ゆずりは 49:69-71.